

日本経済新聞

がん教育でリテラシー向上 大阪・茨木高校で出前授業



日本人のヘルスリテラシーは世界最低レベルといえます。がんはわずかな知識の有無が運命を左右するので、低いヘルスリテラシーはがんによる不幸の源となってきたはずですが。

私も深く関わりましたが、現在は中学・高校の学習指導要領に「がん教育」が明記され、教科書も一新されています。文部科学省は医師やがん経験者といった外部講師の活用も推奨しています。

ところが実際の活用率は1割程度と低迷し、学校医の制度も機能していません。そこで部下の南谷優成医師（東大病院助教）と「医学生によるがん教育推進協会」を2024年12月に設立しました。医学生がボランティアとして学校へ出向き、がん教育を実施するのを目的とした非営利団体です。

今回は、25年12月に大阪府立茨木高校で実施した授業の様態を紹介します。

まず、東大と京都府立医科大学の医学生がプレゼンしました。がんが遺伝子の損傷によって発生すること、良性と悪性の違い、禁煙などの生活習慣と早期発見の重要性などを分かりやすい言葉で説明していました。

子宮頸（けい）がんや中咽頭がんなどを防ぐヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンについて、女性のみならず男性への接種が将来のがん予防につながると語られました。がん検診はあくまでスクリーニングであり、精密検査をきちんと受ける重要性などが強調されました。

がん治療のパートでは、手術・放射線治療・薬物療法の3本柱に加え、免疫療法や個別化医療の進化、緩和ケアが末期に限らず診断時から治療と並行して行われるべきものであることも伝えられました。年齢が近い医学生の話は高校生にとって親しみやすかったようで、誰一人として居眠りしていませんでした。

続いて実施したグループワークには、発表者の医学生2人と東大の医学生3人、そして南谷医師が参加しました。「身近な人ががんになった際にどのようなサポートができるか」「がんに関する社会保障を策定できるとしたら、どのような制度をつくりたいか」の2つの問いが投げかけられ、生徒たちは医学生らと対話しながら考えを深めました。

がん経験者の体験談も聞きました。病気を周囲に伝えないまま復職した際の息苦しさ、患者本人に限らず家族もつらさを抱える現実が語られました。がん経験者の娘が学校でがんを学んだことで家族全体が救われた、というエピソードも印象的でした。

生徒たちにとっても、医学生にとっても、一生忘れられない時間となったはずですが。

2026年1月21日